最近の「シェイクスピア事典」の一考察

～ 情報社会のシェイクスピア ～

佐々木　隆

異文化の諸相　第28号
2007年12月10発行
日本英語文化学会

最近の「シェイクスピア事典」の一考察
～　情報社会のシェイクスピア　～

佐々木隆

プロローグ

シェイクスピアはハムレットを通して演劇の本質を“mirror upto nature”と表現しているが、“nature”を単なる「自然」と捉えるのではなく、人間の周囲にある環境の総合体として考えれば、「社会」であり、「時代」ということになる。この考え方を土台にして、「シェイクスピア事典」に応用すれば、IT社会の象徴とも言えるコンピュータやインターネットを中心とする情報社会の「シェイクスピア事典」では、websiteはどのように取り扱われているのか、またどんな課題があるのかを考察していきたい。特に、資料1「おもなシェイクスピア事典類の概要一覧」と資料2「日本シェイクスピア書誌とインターネット、電子図書館に関する年表」を基に分析していきたい。

1　どんなシェイクスピア事典があるのか

ここでは「事典」という表現については、固執していない。「辞典」「手引」「案内」等、全般的なものを取り扱う。英語で言えば、“encyclopedia” “dictionary” “companion” “guidebook” “guide” “handbook” “A to Z” 等ということになる。特に最近のシェイクスピア事典で「website」について取り上げているものに注目してきたい。具体的には「参考資料」で「website」や「internet」を記載しているものやさらに大きく取り上げ、項目として取り上げているかどうかといったことである。

まず事典の編集方針に注目しておくと、編集方針は2つに大別される。1つは見出し項目の配列がアルファベット順あるいは、五十音順になっているもの。これは言わゆる英和辞典や国語辞典などで採用されている方法である。もう1つは項目主義となっているもので、編集方針に優劣はつけられない。項目主義を採用している事典でも、索引(index)が充実していれば、見出し項目配列の機能を備えることになるのだ。なお、websiteを取り上げているものは、「web」の項目に○印を施した。ここで特に取り上げるシェイクスピア事典の一覧は下記の通りである。(資料1)

また、シェイクスピア研究に限らず、今やインターネットを無視して研究も考えられない時代となったことから、シェイクスピア書誌とインターネットの普及状態については以下の年表を作成した。特に戦後の状況を中心にまとめた。（資料2）

資料1　おもなシェイクスピア事典類の概要一覧

	編集者等	事典・辞典名	発行年月	編集方針	web
1	日本シェイクスピア協会	『シェイクスピア案内』	1964.12	項目主義	×
2	小津次郎	『シェイクスピア・ハンドブック』	1969.11	項目主義	×
3	倉橋健	『シェイクスピア辞典』	1972.08	五十音順	×
4	福田恆存	『シェイクスピア　ハンドブック』	1987.09	項目主義	×
5	高橋康也	『シェイクスピア・ハンドブック』	1994.12	五十音順	×
6	小津次郎	『シェイクスピア作品鑑賞事典』（2の増補、改題）	1997.05	項目主義	×
7	高橋康也	『研究社シェイクスピア辞典』	2000.11	五十音順	○
8	荒井良雄	『シェイクスピア大事典』	2002.10	項目主義	○
9	水谷八也・水谷利美訳	『シェイクスピア・ヴィジュアル事典』（16の翻訳）	2002.01	項目主義	×

	編集者等	事典・辞典名	発行年	編集方針	web
10	O.J.Campbell, E.O.Quinn	*The Reader's Encyclopedia of Shakespeare*	1966	ABC順	×
11	Stanley Wells	*The Cambridge Companion to Shakespeare Studies*	1986	項目主義	×
12	Levi Fox	*The Shakespeare Handbook*	1987	項目主義	×
13	Charles Boyce	*Shakespeare A to Z*	1990	ABC順	×
14	Russ McDonald	*The Bedford Companion to Shakespeare*	2001	項目主義	○

15	Stanley Wells Lena Cowen Orlin	*An Oxford Shakespeare: Guide*	2003	項目主義	○
16	L.Dunton-Downer Alan Ridling	*Essential Shakespeare Handbook*	2004	項目主義	×
17	Andrew Dickson	*The Rough Guide to Shakespeare*	2005	項目主義	○

（佐々木隆作成）

資料2　日本シェイクスピア書誌とインターネット、電子図書館に関する年表

1930　日本シェイクスピア協会設立（第1次）
1940　Toyoda, Minoru. Shakespeare in Japan (Iwanami Shoten)
1949　山本二郎編「シェークスピヤ書誌」/加藤長治編「シェークスピヤ劇上演年表」（日本演劇協会編『シェイクスピヤ研究』中央公論社）
1967　Ohio College Library Center 発足。（現在の Online Computer Library Center）世界最大の書誌ユーティリティ
1981　国立国会図書館、和図書データベース作成に着手。JAPAN/MARC は頒布開始
1984　為房裕子，中島厚子編『日本におけるシェイクスピア書誌』（女子聖学院短期大学）
1986　●文部省学術情報センター（NACSIS）発足
1988　国立国会図書館、J-BISC 刊行。（JAPAN/MARC の CD-ROM 版）
1988　佐々木隆編『日本のシェイクスピア』（エルピス）
1989　オックスフォード版シェイクスピア全集（Electronic edition. FD版）
1988　電子図書館研究会設立
1990　佐々木隆編『日本シェイクスピア総覧』エルピス
1991　●ヨーロッパ原子核共同研究所（CERN）が World Wide Web を開発
1992　文部省学術情報センターがインターネット・バックボーンSINETの運用を開始
1992　●日本で商用ネットワークサービスが開始される
1993　郵政省による電子図書館開発支援開始
1994　国立国会図書館、NDL CD-ROM Line 頒布開始。（雑誌記事索引カレント版）

1995　加藤行夫・境野直樹「インターネットと文学研究」(『英語青年』第141巻第3号)
1995　岡田毅「インターネットを利用した英語学研究」(『英語青年』第141　巻第5号)
1995　佐々木隆編『日本シェイクスピア総覧2』(エルピス)
1996　●国立国会図書館ホームページを公開
1996　★日本シェイクスピア学会　学会セミナー「コンピュータとシェイクスピア研究」(境野直樹＝コーディネーター)
1996　Salomone, Ronald E., and Davis, James E., editors. *Teaching Shakespeare into the Twenty-First Century* (Ohio University Press)
1997　文部省学術情報センター(NACSIS)、登録利用者に本格サービスを提供開始(電子図書館サービス NACSIS-Electronic Library Service)
1997　●国立国会図書館、和図書オンライン閲覧目録(OPAC)提供開始
1997　★有馬哲生「電子メディアによる文学研究の新展開(1) サイバースペースのシェイクスピア——デジタル化されるシェイクスピア研究」(『英語青年』第142巻第10号)
1997　石木利明「英米文学研究のためのインターネット」(『英語青年』第142巻第10号)
1998　★加藤行夫「サイバースペースのシェイクスピア」(『英語青年』第144巻第13号)
1998　研究開発支援総合ディレクトリ(ReaD)の情報提供開始
1998　国立国会図書館「国立国会図書館電子図書館構想」発表
1998　高橋康也監修／佐々木隆編『シェイクスピア研究資料集成』(別巻1・2)(日本図書センター)
1999　★日本シェイクスピア協会ホームページ正式公開
1999　★境野直樹「学会とネットワーク」(*Shakespeare News*, Vol.XXXIX No.2)
2000　国立国会図書館、和図書200万件、洋図書20万件の書誌情報を提供するWeb-OPACをインターネット上で公開
2000　国立国会図書館、CD-ROM等のパッケージ電子出版物の正式納本開始
2000　国立情報学研究所(NII)設立
2002　国立国会図書館、雑誌記事索引をNDL-OPACで全件提供開始
2002　『研究社シェイクスピア辞典』(CD-ROM)(研究社)

2002　Clark, Sandora（境野直樹訳）・浜名恵美「マルチメディアとシェイクスピアとグローバル化」（荒井良雄・大場建治・川崎淳之助編『シェイクスピア大事典』（日本図書センター）

2002　●国立国会図書館、一般登録利用者のインターネット経由遠隔利用サービス開始

2003　『シェイクスピア大全』（CD-ROM）（新潮社）*180本の翻訳とThe New Arden版の原文が収録されている。

2005　佐々木隆『日本シェイクスピア総覧　天保11年——平成14年』（CD-ROM）（エルピス）

2006　★佐々木隆「情報文化時代における日本シェイクスピア書誌の一考察」（『武蔵野学院大学研究紀要』第3輯）

（●インターネット関係　★シェイクスピアとインターネット）

（佐々木隆作成）

2　資料1「おもなシェイクスピア事典類の概要一覧」（1～9）の分析

概要一覧で取り上げた和書9冊のうち、2000年以降のもので2冊がwebsiteを取り上げているので、この2冊についてもう少し解説しておきたい。

（資料1の7）高橋康也・大場建治・喜志哲雄・村上淑郎編『研究社シェイクスピア辞典』（研究社、2000年11月、973pp.）
五十音順で配列され、全体では2500項目に及ぶ網羅的なシェイクスピ辞典である。執筆者は87名。websiteの取り扱いについては河合祥一郎「文献解題——海外編」（pp.906--925）のうち、The World Shakespeare Bibliography Online (http://www-english.tamu.edu/wsb/) をはじめ、いくつか紹介されている程度。また、CD-ROMも紹介されているが、書誌や辞典の中で言及の域を出ない。websiteを単独では扱ってはいない。

（資料1の8）荒井良雄・大場建治・川崎淳之助編集主幹『シェイクスピア大事典』（日本図書センター、2002年10月、1037pp.）
大項目主義によるシェイクスピア百科事典。16章構成。執筆者は79名。websiteの取り扱いについては、大項目「Ⅸ 21世紀のシェイクスピア」（pp.518-527）で大きく取り上げられている。Sandora Clark（境野直樹訳）・浜名恵美「21世紀のシェイクスピア」の中で、「マルチメディア

とシェイクスピアとグローバル化」が取り上げられている。さらに付録の「書誌」では、浜名恵美「Ⅸ 21世紀のシェイクスピア」として、1）関連文献、2）マルチメディア情報源として大別し、さらに下位項目が続く。

1　マルチメディア・プロジェクト
2　インターネット
3　データベース（CD-ROMを含む）
4　電子通信・会議

また、付録Ⅲには岩永弘人・佐々木隆「CD-ROM」のリストもある。

3　資料1「おもなシェイクスピア事典類の概要一覧」（10～17）の分析

概要一覧で取り上げた洋書8冊のうち、2000年以降のものでは3冊がwebsiteについて取り上げているので、この3冊についてもう少し解説しておきたい。

（資料1の14）McDonald, Russ. *The Bedford Companion to Shakespeare* (Boston, New York: Bedford/St.Martin's, 2001)
"Appendix" には "Shakespeare Resources on the Web" (pp.422-426) が取り上げられている。これまでは、bibliographyはあったが、本書はwww.上のsiteを紹介したものが取り上げられているのである。"Starting Points for Shakespeare Internet Searches" と題してwebsiteを紹介している。

（資料1の15）Wells, Stanley, and Lena Cowen Orlin. *An Oxford Shakespeare: Guide* (Oxford: Oxford University Press, 2003)
Michael Bestによる "Internet and CD ROM resources" (pp.673-687) が収録されている。ここではinternet, site, CD-ROMの資料も取り上げられているのである。

（資料1の17）Dickson, Andrew. *The Rough Guide to Shakespeare* (New York: Rough Guides Ltd., 2005)
"Websites" (pp.498-509) としてかなりのwebsiteが紹介されている。おもな分類は以下の通りである。
Shakespeare gateways, Shopping for Shakespeare, Texts and concor-

dance, Online DVD rental, Shakespeare theatres, companies and festivals, Study guides & educational sites, Discussion groups, The authorship debate, Libraries, organizations and other institutions, Journals and criticism, Renaissance gatewarys and tools, Subscription-only sites, Fun stuff

4　資料2　「日本シェイクスピア書誌とインターネット、電子図書館に関する年表」の分析

1991年にヨーロッパ原子核共同研究所がWorld Wide Webを開発し、日本でも1992年より商用でネットワークサービスが開始されたことは、今日の日本におけるユビキタス時代到来を考えれば大きなターニングポイントであった。国立国会図書館は1996年にはホームページを公開、1997年よりオンライン閲覧目録(OPAC)の提供を開始した。1999年には日本シェイクスピア協会も公式ホームページを公開。全体的に見ると、1996年以降、インターネットは加速的に普及した感がある。国内では、この背景として当時の森喜郎首相が提唱したIT革命が大きな要因となっていることは言うまでもないことである。この提唱は小泉元首相によってさらに推し進められ、特に首相官邸自らがメルマガを発信するなど、2000年以降のインターネットの普及振りは目を見張るものがある。インターネットの持つユビキタス的な性格だけではなくて、資料が必ずしも紙媒体によるものだけではないということも、周知させることにもなったと考えてもよいのではないだろうか。インターネットの資料も研究という分野でも大いに活用されるようになったと言っても過言ではない。

日本の国内ではインターネットを利用した文学研究についてはどのように捉えられているのだろうか。1995年6月の『英語青年』には、加藤行夫・境野直樹による「インターネットと文学研究」が発表された。論文の構成は「インターネットとは」「文学作品の電子データ」「オンライン図書館検索とWWW」「電子メール／メーリングリスト」「SHAKSPER」「インターネットへの参加を」である。今でこそ当たり前の内容であるが、10数年前でのこの指摘は、時代の流れを確実に見抜いたことになる。当時としてはこれが最新の情報のひとつであった。1996年10月の日本シェイクスピア協会の学会セミナーでは「コンピュータとシェイクスピア研究」(境野直樹＝コーディネーター) が企画され、『英語青年』では、1997年

1月には有馬哲生の「電子メディアによる文学研究の新展開(1)サイバースペースのシェイクスピア――デジタル化されるシェイクスピア研究」、1998年8月には加藤行夫「サイバースペースのシェイクスピア」が掲載された。2002年10月の荒井良雄・大場建治・川崎淳之助編集主幹の『シェイクスピア大事典』(日本図書センター)には、Sandora Clark (境野直樹訳)・浜名恵美「21世紀のシェイクスピア」の中で、「マルチメディアとシェイクスピアとグロバール化」が取り上げられたのだ。

WWW(World Wide Web)では、もはや国境という考え方は存在しない。むしろ、どのサイトのどのホームページが充実しているのかといったことが大きな関心事となるのだ。そこに求められるものは、情報の「質と量」の問題だと思われる。「質」とは情報の信頼性が第1である。従来の紙媒体による「シェイクスピア書誌」であれば、誰が作成したものかがわかり、その作成者の名前がひとつの信頼性の裏付けとなる。もちろん、調査する者が現物にあたることが最もよいことは言うまでもないことだが。しかし、ホームページの管理人はほとんどが匿名である。また、学会や各種団体の公式ホームページの場合には、個人名は特定できないものの、ある程度は責任の所在がはっきりするのかもしれない。「量」の問題については、これまでなかなか検索できなかった学術論文、テクニカル・レポートなどのいわゆる「灰色文献」などもかなり簡単にインターネット検索できるようになった。灰色文献とは、一般の流通・販売ルートで入手できる商業出版社以外の出版物の総称で、書籍目録などで容易に所在を確認できる図書のような出版物を白、機密扱いの文献を黒とし、その中間形態の出版物を灰色とし、灰色文献と称している。議会資料、官公庁資料、地方行政資料、国際機関資料、研究報告書、大学等の研究紀要なども灰色文献ということになる。また、科学研究費助成金研究成果報告、博士論文も灰色文献となるが、Webcat plusでの検索ではこうした文献も一部検索できるようになっている。博士論文も出版されれば、出版物として図書扱いとなる。

インターネットであれば、検索は限りがないように思えるが、実際にはそうではない。発信者側の情報不足が大きな問題として取り上げられる。また、十分な情報を持っていたとしても出版との関係から、その一部しか公開していない場合もある。さらに、現在、活字化されているものをまとめてインターネット上に公開するとなれば、著作権の問題も発生するかも

しれないのだ。

さて、ここで日本シェイクスピア協会のホームページ(2007年7月21日現在)に注目してみると、トップページには次のような項目が取り上げられている。「お知らせ」、「事務局」、「行事」、「学会」、「Shakespeare News」、「Shakespeare Studies」、「記念出版」、「活動履歴」、「リンク」、「賛助会員一覧」のメニューがある。このうち「リンク」を開いてみるとさらに、次のメニューが出て来る。

「The International Shakespeare Association」「Shakespeare and Renaissance sites」「The Shakespeare Birthplace Trust」「The On-Line Books Page」「Shakespeare's First Folio: Facsimiles/Texts」「Shakespeare in Japan by Dr Daniel Gallimore, Japan Women's University」「Die Deutshe Shakespeare-Gesellschaft」。「Shakespeare in Japan by Dr Daniel Gallimore, Japan Women's University」のホームページにはさらに次のようなリンク先がある。

「Shakespeare Society of Japan」「Tsubouchi Memorial Theatre Museum」「What's Hamlet to Japan (essay by Ashizu Kaori)」「Shakespeare and Noh」「Performing Shakespeare in Japan」「The Shakespeare Company Japan(theatre company)」「Ku Na'uka(theatre company)」「Shakespeare in Asia」「Shakespeare research database」「World Shakespeare Congress 2006」「RSC in Japan」「Matsuoka Kazuko homepage」「Japanese Shakespeare studies」「Shakespeare Theatre (theatre company)」「AUN (theatre company)」「2 NK Project (theatre company)」「Gekidan Za (theatre company)」「Tokyo Shakespeare Company (theatre company)」「Japan Society for Theatre Research」「Pia (ticketing agent)」

こうしてそれぞれのホームページからリンクして行けばシェイクスピアの情報は無限に広がっていくような錯覚さえ覚える。しかしながら、学会のホームページのようにその管理者に信頼があればよいが、他のホームページについてはその管理者がはっきりしない。いわゆるインターネット特有の匿名性の問題があるのだ。インターネットによる検索は、最新の情

報は早く、しかも大量に入手するには大変有益であるが、過去へ逆上る内容については、データーベースの構築が急務といったところである。一方、紙媒体の書誌は、ある程度限界もあるが、現在のところは、この両者を併用してもまだ「シェイクスピア書誌」であれ、「シェイクスピア情報」であれ、課題が山積しているところである。また、インターネットの場合には、常に更新されていることから、このあたりも長所と短所が共存することとなろう。

最後に産学官連携、研究成果の活用、および研究開発の促進に資することを目的として、国内の大学・公的研究機関等に関する機関情報、研究者情報、研究課題情報、研究資源情報を網羅的に収集・提供している唯一のサイトである研究開発支援総合ディレクトリ(ReaD)を紹介しておきたい。平成18年度には760万件を超えるアクセス数があったと言う。2007年7月21日現在、「シェイクスピア」をキーワードで検索すると、研究者情報499件、研究機関情報4件、研究課題情報3件、研究資源情報1件である。また、同様に「シェイクスピア」をキーワードで検索すると、Yahoo Japanでは約1,620,000件、Googleでは1,370,000件がぞれぞれヒットする。

エピローグ

シェイクスピア事典は、これまでと同じ項目だけを取り上げていくスタイルでは、時代に対応し切れなくなってきたというのが現状である。つまり新しい項目なり、見出し語が必要になってきたということである。これはシェイクスピアに限らず、どの事典についても同様のことではないだろうか。IT社会の象徴とも言えるコンピュータやインターネットを中心とする「情報社会」を考慮すれば、情報文化時代におけるシェイクスピア事典の行方もおのずとシェイクスピアに関するホームページやCD-ROMを取り上げる方向性が加わっていく事になるのも当然のことである。すでに各学会なども公式ホームページを公開し、情報の発信に務め、情報の公開が盛んに行われている。今後はこれまでの情報のデジタル化、これに加えてインターネット上での公開などもさらに加速化されることが予想される中、利用者側のモラルも問われることは必至だ。

参考資料（資料1・2で取り上げた以外のもの）
田中功『情報管理の基礎知識』（海文堂、2002年4月）
日本シェイクスピア協会ホームページ　http://www.s-sj.org/
研究開発支援総合ディレクトリ（ReaD）　http://read.jst.go.jp/

* 本稿は2006年12月9日の日本英語文化学会（於：駒澤大学）で口頭発表した「最近のシェイクスピア事典を巡って」に大幅な加筆修正を施し、改題したものである。なお、日本英語文化学会会報の『JSCE Newsletter』（第2号、2008）のコラムで「web上のシェイクスピア・サイトに関する報告」を行う予定である。